

日本農民詩史

上卷

松永伍一著

松永伍一著

日本農民詩史

上卷

法政大学
出版局

著 者 略 歴

詩人。1930年4月福岡県に生る。八女高校卒業後
ただちに村の中学教師となり、八年間勤務1957年
4月上京、文筆生活に入る。詩論および民俗学的
評論などを多く発表。

〔著書〕

「草の城壁」(母音社刊), 「くまそ唄」(国文社刊)
などの詩集のほか「陽気な農民たち」(未来社刊),
「日本の子守唄」(紀伊国屋書店刊), 「望郷の詩」,
「日本のナショナリズム」 「底辺の美学」(大和
書房刊), 「日本人の愛の唄」(新興出版社刊)など
十数冊がある。

現住所 東京都練馬区上石神井 1-355

日本農民詩史 上巻

1967年10月15日 初版第1刷発行

定価 1,800円

著 者 まつ なが ご いち
松 永 伍 一
発行者 相 島 敏 夫

<発行所>

法 政 大 学 出 版 局

東京都千代田区富士見 2-15-3

振替・東京9 5 8 1 4番

本文印刷・三和印刷 製本・市川製本

乱丁・落丁の場合はお取り換えいたします。

は し が き

かつて農業国などと言いながら、農民生活をうたい、また農民みずからが書いた詩は文学論のモチーフとなることも少く、それらを歴史的に体系化する作業はついに今日まで進められることがなかった。それは詩のなかで農民詩が差別されたという問題の裏面に、農民が政治的にも差別され利用されてきた事実を置いていることを意味する。

私は農民の血をうけ、詩を書いてきた人間であり、二十七年間村に住み百姓もしてきた体験を内攻していく過程で、日本の農民詩の系脈にさぐりを入れる決心をしたのである。それから十年間の資料蒐集と作品批判に費した時間は、私をいよいよ愚直者の座におしあげていくことになるが、それもこうなった以上いたし方のないことでもあった。だが、詩人は死んでも詩はのこるといふ痛ましい背理は文学上の被差別体の上には輝きをもたらさないのではないか、という絶望にも私はいく度となくおそわれた。これは「墓掘り」の仕事ではないか、というおもいにかられたとき、しかし私は地中の無言の詩を「鉦脈」と見ることができた。

それにしても日本人は近代の波にのりおくれまいとする欲求のはげしさのために、さまざまの深い矛盾をもつ自己の階級からの脱出をはたそうとして百年を歩いてきたと言える。米を食いながら米作農民の実体に目を蔽っ

た、という観点にのみ私はこだわらないが、資本主義発達の重要なモメントを担った農民が、土着性を喪失していく自己分解の筋道を意識の外に置こうとしたのは、かれらがおのれの階級につながる劣等感に終始さいなまれたことを示すものだ。私にはおもわれるし、そのことと結びつけて農民詩評価の問題を考えたいのである。祖先の生活のイメージやその無名者の思想をおのれの内部から切除していくことを近代化の必須条件と錯覚した日本人は、そこで一体何を確保できたというのだろうか。近代百年というのは、そのような土着思想の崩壊の原理と、そこから派生する流浪の原理とが深層で対決を回避した、背中あわせのなれあいの歴史のことであった、と私は考える。そして同時に、それらの二つの階層がそれぞれの内なる声を親しく、あるいは逆に激しく憎みつつ聴くことのなかった対話欠除の歴史ともいえるのである。

もちろん、百年単位にのみこだわってものを凝視することは間違いを生みやすい。こと農民にとって積みあげられた百年の背後には、不遇な五百年があり不運な千年が影をとどめているはずであった。とくに「詩」は農民にとっては「唄」と同意語である地点から発しているとみられるし、そこに私は農民詩の祖型を発見し、そこから近代に授受される関係を見た。苛酷な労働と収奪とに苦しめられながら、その渦中に生きた人間の声にならぬ慟哭こそ、のちの農民詩に命脈を通す「詩」の原質であったのである。そういう観点を明らかにしないかぎり、日露戦争前後によく本格的農民詩が大塚甲山らによって創出された事実の真意は掴めない。それは資本主義の膨脹によって下層農民がいよいよ窮地に追いつめられ辛苦する情況と見事に重なってくるし、権力の強大化はしかしまた農民たちの反逆性に点火する反作用をも生んだのである。大正末期から歟をもち働き地主とたたかう小作農民たちが、はじめておのれの言葉で詩を書き、叫びをあげるようになる。ここにも歴史の流れの必然があり、詩もまたインテリゲンチヤの手から耕作農民の手にわたっていくのだ。

しかし、この苦渋にみちた農民詩の栄光は、それが反権力の視座を明確にうち出すことによって、かえって日蔭におしこめられ、埋葬される運命を不幸にも担ったのである。とくに陽の当たるところに立って保身にこれつとめた日本の著名詩人や批評家たちは、そのような事態を見ながら、消されていく生活者の声や思想をとどめようとせぬばかりか、時流をつねに計算しつつ権力や情況に追尾し、これらの野にある無名者たちと絶縁したのだった。それは今日に及んでいる。

私がこの日本農民詩史を書こうとしたのは、単なる無名詩人たちへの鎮魂歌をつづるためではなかった。むしろ、表現しようにも表現のすべを知らずに死んでいった無数の日本農民の内部世界を代弁し、告発することになったというのが正確であるかも知れない。だから近代百年の歴史の波間に出没した農民詩人たちを点描し紹介するという形をできるかぎり避け、情況との深い関連を踏まえながら、詩に賭け、おのれの階級的立場を擲んできた人間の思想のひだに、歴史の動脈をさぐるという方法をとったつもりである。事象を羅列することを好まぬゆえに、この方法は「詩を通じた農民の思想史」という裏の意味を強く抽き出すことになったかも知れない。

私はいま明治・大正期を書き終えた。このあと昭和前期(中巻)、昭和後期(下巻)とつづく歴大な紙数と取り組まねばならないが、幸か不幸か、それらが刊行される期間に「明治百年」の動態を見守ることになるだろう。そのとき、華やかで不毛な祭典に黙って抵抗する自分を発見する幾人かの有志をこの本が獲得してくれたら、まずそれだけでも著者のよろこびになり得るだろうと、私は考えているのである。

一九六七年 初夏

松 永 伍 一

例 言

一、本書は全三巻のうちの第一巻（上巻）であり、主として明治・大正期約六十年間を取材範囲としたものである。

一、本書はよくある「草創期」「停滞期」「興隆期」「最盛期」などという区分をとらなかった。

一、農民詩の背景をより明確にするために、「明治の農村事情」「社会情況と運動」「小作農民の自覚」などの章を加えた。

一、作品の引用は原典にしたがったが、あきらかに誤植とおもえる部分は訂正した。またルビのあるものはつけたが、訓みの不正確なものはそのままにしておいた。

一、詩人の行動と詩作の期間が、大正と昭和にまたがる場合、白鳥省吾、国井淳一、渡部信義、尾崎喜八などは両方に採りあげ、中村孝助、中西悟堂は中巻まわしにし、宮沢賢治は本書で昭和八年の死の周辺までを含めて論じた。

一、登場する詩人のうち、とくに重要な人物については、略歴や著作などを細かく註として記述した。

一、関係詩人のうち現在まで消息不明で調査が不可能だった何人かも含まるが、後日増補改訂の機会にそれらに

ついでには完全を期したい。

一、資料写真が偏った向きもあるが、入手困難だった詩人のものが見つかったときは補充するつもりである。

一、本書では人名はすべて敬称を略させてもらった。

一、資料の採訪その他に当って個人として協力してもらった方々を、本書の分にかぎって列挙し、深い感謝を捧げたい。

白鳥省吾氏 井上康文氏 壺井繁治氏 松村又一氏 秋山清氏 遠地輝武氏 渋谷定輔氏 渡部信義氏 羽
生三七氏 藤森幸氏 花岡謙二氏 土田ふじ子氏 縄田林蔵氏 柳沢七郎氏 佐伯郁郎氏 三輪猛雄氏 泉
浩郎氏 上政治氏 鈴木勝氏 大野孝氏 杉浦盛雄氏 滝口雅子氏 小川猛志氏 鎌田研一氏 和田伝氏
法政大学出版局の諸氏

目 次

口 絵 (資料写真)

はしがき

例 言

第一編 霧のなかの視点

第一章 明治の農村事情 三

地租改正と小作慣行 高草喜謙の『日本農民論』およびフェスカの『日本地産論』

離農化傾向と木下尚江の回想 山田美妙「夏の貧家」 地租減額建白運動 横田英夫

『農村革命論』 小作農の漸増の様相

第二章 ちよんがれと口説 一〇

歌物語および語りの発生 木綿芝居との関連と「佐倉宗吾郎口説」

武左衛門の「ちよんがれ」のもつ諷刺性 「越後簪女くどき」にみる農民詩の祖型

第三章 民権思想と農民

一七

世直し一揆と裏切られた農民

貧農の武装蜂起と自由党の指導性

豪農民権の思想とそ

の矛盾

植木枝盛「民権田舎歌」と家永三郎および柳田泉の評価

農民不在の啓蒙詩

新体詩の反動性と井上巽軒の「比沼山の歌」

山田美妙の構えと農民詩

塩井雨江の

「彼また人の子ならずや」の着想

(註) 植木枝盛の無天雜録

第四章 北村透谷の農民観

三三

政治運動との訣別

未完の大器

「眠れる蝶」における田つくりのイメージ

日夏耿之介の透谷評

(註)「露国の農民」および「徳川時代の平民的理想」

第五章 島崎藤村の農民性

三九

地方主義の思想にたつ問題提起

『藤村詩集』序の時代的推移

『夏草』の構成

「利根川のはとりにて」の農民の対話

『耕稼春秋』における農本思想と藤村

「労働」

と勤労賛美

青野季吉『夜明け前』論

父への鎮魂歌に託す農民性

第六章 船津伝次平の勸農詩

五四

船津伝次平の社会的地位と意見

「勸農ちょぼくれ」と「養蚕の歌」

駒場農学校の実

技指導者となる

巡回教師とちょぼくれの採用

『稲作小言』と林農法批判

民権運動との関係

勸農詩と新体詩

第二編 社会思想の洗礼

第一章 社会状況と運動

七一

「おっぺけべえ節」の流行と壮士彈圧

「教育勸語」と農民

日露戦争と農民の熱狂

的参加

幸徳秋水らの動向と大逆事件

足尾銅山鉍毒事件と農民闘争

底辺のル

ポおよび農民小説の登場

第二章 児玉花外と星人

八四

『社会主義詩集』の発禁

林田春潮「文芸の奇禍」詩は社会主義を歌ふによりて累せらる

べきか」

花外への同情録

「農夫」の視点

花外の国家主義への転向

星人

の「工女」と紡績工場の実体

星人の渡米と「農夫の歌」

(註) 秋山清の『社会主義詩集』評

第三章 大塚甲山の栄光と悲惨

九七

社会主義的文学者の交友関係

石川啄木と甲山

『甲山詩集』の流産

口語散文

詩の先駆的作品「無題」

反戦農民詩「兵士居村を辞す」と思想統制の事情

「村童」に

託す平和な未来像

甲山の反戦句

後藤宙外による文壇追放事件

不遇な死の周辺

(註) 甲山の略歴と未刊の作品および参考文献

中里介石の反戦農民詩

後藤宙外との

往復書簡

甲山研究論文

第四章 俗語詩の周辺

一二四

吉野臥城の「生活の苦悶」と人見東明の批評

俗語詩というカテゴリー

野水「蝦夷

行」の影響か

遠地輝武の批判

内田夕闇の「城下まで」および「麦まき」

(註)「北海道移民の悲惨」(平民新聞)

第三編 牧歌調の限界

第一章 自然賛美の視座

『抒情詩』の詩人たち

宮崎湖処子の『帰省』と望郷感覚

国木田独歩の「冬の山

家」

「山林に自由存す」と政治的思想

太田玉茗「秋興三章」と農村風俗

湯浅

半月の「秋田家」と金子幽花の「冬の田家」の関係

第二章 筑波根詩人——横瀬夜雨

田園ロマंचシズム

「お才」をめぐる事情

酔茗と白秋と耿之介の評価

清水

橋村「小黑女」の思想性

(註)横瀬夜雨の『夕月』にまつわる事件

第三章 牧歌の口語的表現

赤竜散人の「仏国文豪アボローの諷詩」

薄田泣菫「秋の消息」

前田林外「田植雑興」

夏目漱石の描いた農民

志村南城「靱挽倉吉」および今泉磯千鳥「草刈少女」

佐々

木愛湖「稲刈り」

第四編 民衆詩派の功罪

第一章 時代的背景と『民衆』……………一七九

自然主義文学の末期 真山青果「南小泉村」と長塚節「土」の問題 雑誌『民衆』の

創刊と宣言 民衆思想と社会的動態 民衆詩派の特徴

(註)『民衆』の総目次

第二章 文学論争と批判……………一九四

北原白秋の民衆詩人批判 白鳥省吉と福田正夫の芸術派批判 論争一覧表 『明

治大正詩史』における日夏耿之介の決定打 三好達治の民衆詩派批判 遠地輝武「民

衆詩派の史的評価について」 民衆詩派再検討の問題点

(註)論争の要点

第三章 福田正夫の楽天性……………二一〇

福田正夫の育ち 回想的発言 「農民の言葉」の出版と時代的意義 「ベン」の農夫

という発想とマルキシズム 伊福部隆輝の予言 鈴木信治の福田批判(蒼鴉堂藥筆)

第四章 白鳥省吾の位置……………二二一

反戦詩「殺戮の殿堂」の力動感 農民詩の平抜き 「開墾の日」と「美しい国」

壺井繁治「白鳥省吾論」 平明さの盲点

(註)白鳥省吾の略歴および著作

第五章 井上康文と花岡謙二

二五〇

『新詩人』を発行した井上康文

初期の「農人の娘」

福田正夫の影響による変化

『土に祈る』にみられる観念性

「サッコ・ヴァンゼッチの死刑の日」における階級性の問

題 花岡謙二の育ち

山村暮鳥との出会い

『民衆』への参加と農民詩

『母

子像』の発刊およびミドリヤ書店

「畑中の握手」と農民への愛

(註)『日本詩人』の編集権要求の声明書

井上康文の略歴

第六章 小作農民の自覚

二七四

明治末期～大正初期の農民運動

『愛知県農村問題概要』と『小作争議ニ関スル調査』から

「日本農民組合」の創立と宣言

「農民組合歌」と「農民歌」を貫く思想

第五編 田園の詩情

第一章 大衆的ナシヨナリズムの土壌

二八五

小学校教育における唱歌の役割

吉本隆明のナシヨナリズム論

小学唱歌「故郷の空」

「村祭」など

離農者たちの夢に生きる「村」

流浪の唄にみる農民感覚

土俗性

と大衆ナシヨナリズムの重複

第二章 雨情と晩村

二九四

野口雨情の詩的出発

田園詩と田園説話との関係

白鳥省吾の雨情批判

平井晩

村「踏麦」の風俗性 詩集『野葡萄』の収穫

(註) 野口雨情の略歴

第三章 藤森秀夫の触角 三〇七

ドイツ文学者と「めえめえ仔山羊」の作者 「歎」の豪農的視点 「竜巻」の民話的

世界 関次郎の人物評 『稲』の作品

(註) 舟木重信『藤森秀夫遺稿詩集』序

第四章 尾崎喜八の田園賛歌 三一八

尾崎喜八の環境と農村への憧れ 「収穫」 『畝野の火』の自序の問題点 「小作

人の墓碑銘」における農民観

第五章 松村又一の進出 三二七

短歌から詩への転進 『畑の午餐』の詩史上の意義と震災 「大和の百姓」という自覚

百田宗治の指摘のミス 「米俵編む夜」と「唐箕くる音」など 田園肯定の問題と「翼

の抜けた田園」 尾崎喜八への共鳴

第六章 同時代の詩趣 三四八

萩原朔太郎の「田舎を恐る」 楳本楠郎の田園抒情詩とプロレタリア童謡運動との関連

中田信子の「茄子の苗」と故郷思慕 霜田史光と林信一 久保田宵二「冬風」

鈴木信治「牛を挽く牛」など

第六編 大地と信仰の歌

第一章 信仰と労働の接点

三六九

武者小路実篤における貴族性と農民性

「新しき村」の理想と生活内容

『或る男』の

空想から実現まで

「新しき村」に就ての対話

自然の意志と源泉思想への回帰

「新しき村」の趣意書

江渡狄嶺の生き方

第二章 苦悩者・山村暮鳥

三八一

苦悩者としての出発と「半面自叙伝」

キリスト教との出会い

斎藤庸一「三野混沌

覚書」より

「父上のおん手の詩」と「波だてる麦畑の詩」

『風は草木にささやいた』

の跋（土田杏村）

水戸における暮鳥

自然と人間への峻厳な対応

死の周辺

東洋的枯淡

（註）山村暮鳥の略歴

江渡狄嶺の批評

第三章 堀井梁歩の挫折

四〇六

堀井梁歩の青春期とその思想

アメリカへ渡る

『土の精』と「村長さんへ呈するの

書」

「農民ホール」設立から秋田消費組合へ

雑誌『大道』の発刊

朝鮮へ渡る

「天地の抱擁」と生産者賛美

（註）堀井梁歩の略歴

新村出および安倍能成の梁歩観

第四章 八木重吉の祈り

四二〇

高村光太郎の評価

キリストに仕える生活者の思想

信仰から人間愛へ

「私は

聴く」のためらいと「下駄の話」の心

民衆をうたえぬ詩人の謙虚さ

第五章 賢者宮沢賢治の内面

四二八

宮沢賢治の大衆的人気の秘密

「雨ニモマケズ」の功罪

谷川徹三の賢者像の分析

盛岡高等農林学校時代の土性調査

国柱会での活動

花巻農学校教師となる 心

象スケッチ『春と修羅』の自費出版

「原体劔舞連」の外景と内景

「羅須地人協会」

の設立と実践

東北農村の実情

「稲作挿話」

「和風は河谷いっばいに吹く」

「それでは計算いたしませう」および「野の婦父」

賢治の革命観

「家」の問題と中

村稔の指摘

「農民芸術概論綱要」全文

死の周囲と「雨ニモマケズ」

(註) 宮沢賢治の略歴と著作論文書

第七編 反逆の叫び

第一章 プロレタリア詩運動の萌芽

四七九

日本共産党結成の前後

テロリストの一味後藤謙太郎の農民詩

『赤と黒』の創刊と

中野重治の指摘

『鎖』および『無産詩人』創刊

アナからボルへの転戦と陀田勘助

の重農主義批判

萩原恭次郎の「畑と人間」

高村光太郎のプロレタリア詩観